杜子春

芥川龍之介

一

或（ある）春の日暮です。

唐（とう）の都洛陽（らくよう）の西の門の下に、ぼんやり空を仰いでいる、一人の若者がありました。

若者は名を杜子春といって、元は金持の息子でしたが、今は財産を費（つか）い尽して、その日の暮しにも困る位、憐（あわれ）な身分になっているのです。

何しろその頃洛陽といえば、天下に並ぶもののない、繁昌（はんじょう）を極（きわ）めた都ですから、往来にはまだしっきりなく、人や車が通っていました。門一ぱいに当っている、油

のような夕日の光の中に、老人のかぶった紗（しゃ）の帽子や、土耳古（トルコ）の女の金の耳環（みみわ）や、白馬（しろうま）に飾った色糸の手綱（たづな）が、絶えず流れて行く容子（ようす）は、まるで画のような美しさです。

しかし杜子春は相変らず、門の壁に身を凭（もた）せて、ぼんやり空ばかり眺（なが）めていました。空には、もう細い月が、うらうらと靡（なび）いた霞（かすみ）の中に、まるで爪の痕（あと）かと思う程、かすかに白く浮んでいるのです。

「日は暮れるし、腹は減るし、その上もうどこへ行っても、泊めてくれる所はなさそうだし——こんな思いをして生きている位なら、一そ川へでも身を投げて、

死んでしまった方がましかも知れない」

杜子春はひとりさっきから、こんな取りとめもないことを思いめぐらしていたのです。

するとどこからやって来たか、突然彼の前へ足を止めた、片目眇（すがめ）の老人があります。それが夕日の光を浴びて、大きな影を門へ落すと、じっと杜子春の顔を見ながら、

「お前は何を考えているのだ」と、横柄に声をかけました。

「私（わたし）ですか。私は今夜寝る所もないので、どうしたものかと考えているのです」

老人の尋ね方が急でしたから、杜子春はさすがに眼を伏せて、思わず正直な答をしました。

「そうか。それは可哀そうだな」

老人は暫(しばら)く何事か考えているようでしたが、やがて、往来にさしている夕日の光を指さしながら、

「ではおれが好(い)いことを一つ教えてやろう。今この夕日の中に立って、お前の影が地に映ったら、その頭に当る所を夜中(よなか)に掘って見るが好い。きっと車に一ぱいの黄金(おうごん)が埋(う)まっている筈(はず)だから」

「ほんとうですか」

杜子春は驚いて、伏せていた眼を挙(あ)げました。とこ

ろが更に不思議なことには、あの老人はどこへ行ったか、もうあたりにはそれらしい、影も形も見当りません。その代り空の月の色は前よりも猶(なお)白くなって、休みない往来の人通りの上には、もう気の早い蝙蝠(こうもり)が二三匹ひらひら舞っていました。

二

杜子春は一日の内に、洛陽の都でも唯(ただ)一人という大金持になりました。あの老人の言葉通り、夕日に影を映して見て、その頭に当る所を、夜中にそっと掘って

見たら、大きな車にも余る位、黄金が一山出て来たのです。

大金持になった杜子春は、すぐに立派な家（うち）を買って、玄宗（げんそう）皇帝にも負けない位、贅沢（ぜいたく）な暮しをし始めました。蘭陵（らんりょう）の酒を買わせるやら、桂州（けいしゅう）の竜眼肉（りゅうがんにく）をとりよせるやら、日に四度（よたび）色の変る牡丹（ぼたん）を庭に植えさせるやら、白孔雀（しろくじゃく）を何羽も放し飼いにするやら、玉を集めるやら、錦（にしき）を縫わせるやら、香木（こうぼく）の車を造らせるやら、象牙（ぞうげ）の椅子を誂（あつら）えるやら、その贅沢を一々書いていては、いつになってもこの話がおしまいにならない位です。

するとこういう噂（うわさ）を聞いて、今までは路（みち）で行き合っても、挨拶（あいさつ）さえしなかった友だちなどが、朝夕遊びにやって来ました。それも一日毎（ごと）に数が増して、半年ばかり経（た）つ内には、洛陽の都に名を知られた才子や美人が多い中で、杜子春の家へ来ないものは、一人もない位になってしまったのです。杜子春はこの御客たちを相手に、毎日酒盛りを開きました。その酒盛りの又盛（さかん）なことは、中々（なかなか）口には尽されません。極（ごく）かいつまんだだけをお話しても、杜子春が金の杯（さかずき）に西洋から来た葡萄酒（ぶどうしゅ）を汲（く）んで、天竺（てんじく）生れの魔法使が刀を呑（の）んで見せる芸に見とれていると、そのまわりには二十人の

女たちが、十人は翡翠（ひすい）の蓮（はす）の花を、十人は瑪瑙（めのう）の牡丹の花を、いずれも髪に飾りながら、笛や琴を節（ふし）面白く奏しているという景色なのです。

　しかしいくら大金持でも、御金には際限がありますから、さすがに贅沢家の杜子春も、一年二年と経つ内には、だんだん貧乏になり出しました。そうすると人間は薄情なもので、昨日（きのう）までは毎日来た友だちも、今日は門の前を通ってさえ、挨拶一つして行きません。ましてとうとう三年目の春、又杜子春が以前の通り、一文無しになって見ると、広い洛陽の都の中にも、彼に宿を貸そうという家は、一軒もなくなってしまいま

した。いや、宿を貸すどころか、今では椀（わん）に一杯の水も、恵んでくれるものはないのです。

そこで彼は或日の夕方、もう一度あの洛陽の西の門の下へ行って、ぼんやり空を眺めながら、途方に暮れて立っていました。するとやはり昔のように、片目眇（すがめ）の老人が、どこからか姿を現して、

「お前は何を考えているのだ」と、声をかけるではありませんか。

杜子春は老人の顔を見ると、恥しそうに下を向いたまま、暫くは返事もしませんでした。が、老人はその日も親切そうに、同じ言葉を繰返しますから、こちら

も前と同じように、

「私は今夜寝る所もないので、どうしたものかと考えているのです」と、恐る恐る返事をしました。

「そうか。それは可哀そうだな。ではおれが好(い)いことを一つ教えてやろう。今この夕日の中へ立って、お前の影が地に映ったら、その胸に当る所を、夜中に掘って見るが好い。きっと車に一ぱいの黄金が埋まっている筈だから」

老人はこう言ったと思うと、今度もまた人ごみの中へ、搔(か)き消すように隠れてしまいました。

杜子春はその翌日から、忽(たちま)ち天下第一の大金持に

返りました。と同時に相変らず、仕放題な贅沢をし始めました。庭に咲いている牡丹の花、その中に眠っている白孔雀、それから刀を呑んで見せる、天竺から来た魔法使――すべてが昔の通りなのです。

　ですから車に一ぱいにあった、あの夥しい黄金も、又三年ばかり経つ内には、すっかりなくなってしまいました。

三

「お前は何を考えているのだ」

片目眇（すがめ）の老人は、三度杜子春（とししゅん）の前へ来て、同じことを問いかけました。勿論（もちろん）彼はその時も、洛陽の西の門の下に、ほそぼそと霞を破っている三日月の光を眺めながら、ぼんやり佇（たたず）んでいたのです。

「私ですか。私は今夜寝る所もないので、どうしようかと思っているのです」

「そうか。それは可哀そうだな。ではおれが好いことを教えてやろう。今この夕日の中へ立って、お前の影が地に映ったら、その腹に当る所を、夜中に掘って見るが好い。きっと車に一ぱいの――」

老人がここまで言いかけると、杜子春は急に手を挙

げて、その言葉を遮(さえぎ)りました。

「いや、お金はもういらないのです」

「金はもういらない？　ははあ、では贅沢をするにはとうとう飽きてしまったと見えるな」

老人は審(いぶか)しそうな眼つきをしながら、じっと杜子春の顔を見つめました。

「何、贅沢に飽きたのじゃありません。人間というものに愛想(あいそ)がつきたのです」

杜子春は不平そうな顔をしながら、突慳貪(つっけんどん)にこう言いました。

「それは面白いな。どうして又人間に愛想が尽きたの

だ？」

「人間は皆薄情です。私が大金持になった時には、世辞も追従（ついしょう）もしますけれど、一旦貧乏になって御覧なさい。柔（やさ）しい顔さえもして見せはしません。そんなことを考えると、たといもう一度大金持になったところが、何にもならないような気がするのです」

老人は杜子春の言葉を聞くと、急ににやにや笑い出しました。

「そうか。いや、お前は若い者に似合わず、感心に物のわかる男だ。ではこれからは貧乏をしても、安らかに暮して行くつもりか」

杜子春はちょいとためらいました。が、すぐに思い切った眼を挙げると、訴えるように老人の顔を見ながら、

「それも今の私には出来ません。ですから私はあなたの弟子（でし）になって、仙術（せんじゅつ）の修業をしたいと思うのです。いいえ、隠してはいけません。あなたは道徳の高い仙人でしょう。仙人でなければ、一夜（ひとよ）の内に私を天下第一の大金持にすることは出来ない筈です。どうか私の先生になって、不思議な仙術を教えて下さい」

老人は眉（まゆ）をひそめたまま、暫くは黙って、何事か考えているようでしたが、やがて又にっこり笑いながら、

「いかにもおれは峨眉山（がびさん）に棲（す）んでいる、鉄冠子（てっかんし）という仙人だ。始めお前の顔を見た時、どこか物わかりが好さそうだったから、二度まで大金持にしてやったのだが、それ程仙人になりたければ、おれの弟子にとり立ててやろう」と、快く願（ねがい）を容（い）れてくれました。

杜子春は喜んだの、喜ばないのではありません。老人の言葉がまだ終らない内に、彼は大地に額をつけて、何度も鉄冠子に御時宜（おじぎ）をしました。

「いや、そう御礼などは言って貰うまい。いくらおれの弟子にしたところが、立派な仙人になれるかなれないかは、お前次第で決まることだからな。——が、と

もかくもまずおれと一しょに、峨眉山の奥へ来て見るが好い。おお、幸、ここに竹杖が一本落ちている。では早速これへ乗って、一飛びに空を渡るとしよう」

鉄冠子はそこにあった青竹を一本拾い上げると、口の中に呪文を唱えながら、杜子春と一しょにその竹へ、馬にでも乗るように跨りました。すると不思議ではありませんか。竹杖は忽ち竜のように、勢よく大空へ舞い上って、晴れ渡った春の夕空を峨眉山の方角へ飛んで行きました。

杜子春は胆をつぶしながら、恐る恐る下を見下しました。が、下には唯青い山々が夕明りの底に見えるば

かりで、あの洛陽の都の西の門は、（とうに霞に紛れたのでしょう）どこを探しても見当りません。その内に鉄冠子は、白い鬢の毛を風に吹かせて、高らかに歌を唱い出しました。

　朝に北海に遊び、暮には蒼梧。
袖裏の青蛇、胆気粗なり。
三たび岳陽に入れども、人識らず。
朗吟して、飛過す洞庭湖。

四

二人を乗せた青竹は、間もなく峨眉山へ舞い下(さが)りました。

そこは深い谷に臨んだ、幅の広い一枚岩の上でしたが、よくよく高い所だと見えて、中空(なかぞら)に垂れた北斗の星が、茶碗(ちゃわん)程の大きさに光っていました。元より人跡(じんせき)の絶えた山ですから、あたりはしんと静まり返って、やっと耳にはいるものは、後(うしろ)の絶壁に生(は)えている、曲りくねった一株の松が、こうこうと夜風に鳴る音だけです。

二人がこの岩の上に来ると、鉄冠子は杜子春を絶壁の下に坐らせて、

「おれはこれから天上へ行って、西王母に御眼にかかって来るから、お前はその間ここに坐って、おれの帰るのを待っているが好い。多分おれがいなくなると、いろいろな魔性が現れて、お前をたぶらかそうとするだろうが、たといどんなことが起ろうとも、決して声を出すのではないぞ。もし一言でも口を利いたら、お前は到底仙人にはなれないものだと覚悟をしろ。好いか。天地が裂けても、黙っているのだぞ」と言いました。

「大丈夫です。決して声なぞは出しません。命がなくなっても、黙っています」

「そうか。それを聞いて、おれも安心した。ではおれは行って来るから」

老人は杜子春に別れを告げると、又あの竹杖に跨って、夜目にも削ったような山々の空へ、一文字に消えてしまいました。

杜子春はたった一人、岩の上に坐ったまま、静（しずか）に星を眺めていました。するとかれこれ半時（はんとき）ばかり経って、深山の夜気が肌寒く薄い着物に透（とお）り出した頃、突然空中に声があって、

「そこにいるのは何者だ」と、叱りつけるではありませんか。

しかし杜子春は仙人の教（おしえ）通り、何とも返事をしずにいました。

ところが又暫くすると、やはり同じ声が響いて、

「返事をしないと立ちどころに、命はないものと覚悟しろ」と、いかめしく嚇（おど）しつけるのです。

杜子春は勿論黙っていました。

と、どこから登って来たか、爛々（らんらん）と眼を光らせた虎（とら）が一匹、忽然（こつぜん）と岩の上に躍（のぼ）り上って、杜子春の姿を睨（にら）みながら、一声高く哮（たけ）りました。のみならずそれと同時に、頭の上の松の枝が、烈（はげ）しくざわざわ揺れたと思うと、後（うしろ）の絶壁の頂からは、四斗樽（しとだる）程の白蛇（はくだ）が一匹、

炎のような舌を吐いて、見る見る近くへ下りて来るのです。

杜子春はしかし平然と、眉毛も動かさずに坐っていました。

虎と蛇とは、一つ餌食を狙って、互に隙でも窺うのか、暫くは睨合いの体でしたが、やがてどちらが先ともなく、一時に杜子春に飛びかかりました。が虎の牙に噛まれるか、蛇の舌に呑まれるか、杜子春の命は瞬く内に、なくなってしまうと思った時、虎と蛇とは霧の如く、夜風と共に消え失せて、後には唯、絶壁の松が、さっきの通りこうこうと枝を鳴らしているばかり

なのです。杜子春はほっと一息しながら、今度はどんなことが起るかと、心待ちに待っていました。

　すると一陣の風が吹き起って、墨のような黒雲が一面にあたりをとざすや否や、うす紫の稲妻がやにわに闇を二つに裂いて、凄（すさま）じく雷（らい）が鳴り出しました。いや、雷ばかりではありません。それと一しょに瀑（たき）のような雨も、いきなりどうどうと降り出したのです。杜子春はこの天変の中（なか）に、恐れ気（げ）もなく坐っていました。風の音、雨のしぶき、それから絶え間ない稲妻の光、――暫くはさすがの峨眉山も、覆（くつがえ）るかと思う位でしたが、その内に耳をもつんざく程、大きな雷鳴が轟（とどろ）いた

と思うと、空に渦巻いた黒雲の中から、まっ赤な一本の火柱が、杜子春の頭へ落ちかかりました。

杜子春は思わず耳を抑えて、一枚岩の上へひれ伏しました。が、すぐに眼を開いて見ると、空は以前の通り晴れ渡って、向うに聳えた山々の上にも、茶碗ほどの北斗の星が、やはりきらきら輝いています。して見れば今の大あらしも、あの虎や白蛇と同じように、鉄冠子の留守をつけこんだ、魔性の悪戯に違いありません。杜子春は漸く安心して、額の冷汗を拭いながら、又岩の上に坐り直しました。

が、そのため息がまだ消えない内に、今度は彼の坐っ

ている前へ、金の鎧（よろい）を着下（きくだ）した、身の丈（たけ）三丈もあろうという、厳（おごそ）かな神将が現れました。神将は手に三叉（みつまた）の戟（ほこ）を持っていましたが、いきなりその戟の切先（きっさき）を杜子春の胸（むな）もとへ向けながら、眼を嗔（いか）らせて叱りつけるのを聞けば、

「こら、その方は一体何物だ。この峨眉山という山は、天地開闢（かいびゃく）の昔から、おれが住居（すまい）をしている所だぞ。それも憚（はばか）らずたった一人、ここへ足を踏み入れるとは、よもや唯の人間ではあるまい。さあ命が惜しかったら、一刻も早く返答しろ」と言うのです。

しかし杜子春は老人の言葉通り、黙然（もくねん）と口を噤（つぐ）んで

いました。

「返事をしないか。――しないな。好し。しなければ、しないで勝手にしろ。その代りおれの眷属たちが、その方をずたずたに斬ってしまうぞ」

神将は戟を高く挙げて、向うの山の空を招きました。その途端に闇がさっと裂けると、驚いたことには無数の神兵が、雲の如く空に充満ちて、それが皆槍や刀をきらめかせながら、今にもここへ一なだれに攻め寄せようとしているのです。

この景色を見た杜子春は、思わずあっと叫びそうにしましたが、すぐに又鉄冠子の言葉を思い出して、一

生懸命に黙っていました。神将は彼が恐れないのを見ると、怒（おこ）ったの怒らないのではありません。

「この剛情者め。どうしても返事をしなければ、約束通り命はとってやるぞ」

神将はこう喚（わめ）くが早いか、三叉の戟を閃（ひらめ）かせて、一突きに杜子春を突き殺しました。そうして峨眉山もどよむ程、からからと高く笑いながら、どこともなく消えてしまいました。勿論この時はもう無数の神兵も、吹き渡る夜風の音と一しょに、夢のように消え失せた後だったのです。

北斗の星は又寒そうに、一枚岩の上を照らし始めま

した。絶壁の松も前に変らず、こうこうと枝を鳴らせています。が、杜子春はとうに息が絶えて、仰向(あおむ)けにそこへ倒れていました。

五

杜子春の体は岩の上へ、仰向けに倒れていましたが、杜子春の魂は、静に体から抜け出して、地獄の底へ下りて行きました。

この世と地獄との間には、闇穴道(あんけつどう)という道があって、そこは年中暗い空に、氷のような冷たい風がぴゅう

ぴゅう吹き荒（すさ）んでいるのです。杜子春はその風に吹かれながら、暫くは唯木（こ）の葉のように、空を漂って行きましたが、やがて森羅殿（しんらでん）という額（がく）の懸（かか）った立派な御殿の前へ出ました。

　御殿の前にいた大勢の鬼は、杜子春の姿を見るや否や、すぐにそのまわりを取り捲（ま）いて、階（きざはし）の前へ引き据えました。階の上には一人の王様が、まっ黒な袍（きもの）に金の冠をかぶって、いかめしくあたりを睨んでいます。これは兼ねて噂（うわさ）に聞いた、閻魔（えんま）大王に違いありません。杜子春はどうなることかと思いながら、恐る恐るそこへ跪（ひざまず）いていました。

「こら、その方は何の為に、峨眉山の上へ坐っていた？」

閻魔大王の声は雷のように、階の上から響きました。杜子春は早速その問に答えようとしましたが、ふと又思い出したのは、「決して口を利くな」という鉄冠子の戒めの言葉です。そこで唯頭を垂れたまま、唖のように黙っていました。すると閻魔大王は、持っていた鉄の笏を挙げて、顔中の鬚を逆立てながら、

「その方はここをどこだと思う？　速に返答をすれば好し、さもなければ時を移さず、地獄の呵責に遇わせてくれるぞ」と、威丈高に罵りました。

が、杜子春は相変らず唇(くちびる)一つ動かしません。それを見た閻魔大王は、すぐに鬼どもの方を向いて、荒々しく何か言いつけると、鬼どもは一度に畏(かしこま)って、忽(たちま)ち杜子春を引き立てながら、森羅殿の空へ舞い上りました。

地獄には誰でも知っている通り、剣(つるぎ)の山や血の池の外にも、焦熱地獄という焔(ほのお)の谷や極寒(ごくかん)地獄という氷の海が、真暗な空の下に並んでいます。鬼どもはそういう地獄の中へ、代る代る杜子春を抛(ほう)りこみました。ですから杜子春は無残にも、剣に胸を貫かれるやら、焔に顔を焼かれるやら、舌を抜かれるやら、皮を剥(は)が

れるやら、鉄の杵（きね）に撞（つ）かれるやら、油の鍋（なべ）に煮られるやら、毒蛇に脳味噌（のうみそ）を吸われるやら、熊鷹（くまたか）に眼を食われるやら、——その苦しみを数え立てていては、到底際限がない位、あらゆる責苦（せめく）に遇（あ）わされたのです。それでも杜子春は我慢強く、じっと歯を食いしばったま、一言（ひとこと）も口を利きませんでした。

　これにはさすがの鬼どもも、呆（あき）れ返ってしまったのでしょう。もう一度夜（よる）のような空を飛んで、森羅殿の前へ帰って来ると、さっきの通り杜子春を階（きざはし）の下に引き据えながら、御殿の上の閻魔大王に、

「この罪人はどうしても、ものを言う気色（けしき）がございま

せん」と、口を揃えて言上しました。

閻魔大王は眉をひそめて、暫く思案に暮れていましたが、やがて何か思いついたと見えて、

「この男の父母は、畜生道に落ちている筈だから、早速ここへ引き立てて来い」と、一匹の鬼に言いつけました。

鬼は忽ち風に乗って、地獄の空へ舞い上りました。と思うと、又星が流れるように、二匹の獣を駆り立てながら、さっと森羅殿の前へ下りて来ました。その獣を見た杜子春は、驚いたの驚かないのではありません。なぜかといえばそれは二匹とも、形は見すぼらしい痩

せ馬でしたが、顔は夢にも忘れない、死んだ父母の通りでしたから。

「こら、その方は何のために、峨眉山の上に坐っていたか、まっすぐに白状しなければ、今度はその方の父母に痛い思いをさせてやるぞ」

杜子春はこう嚇(おど)されても、やはり返答をしずにいました。

「この不孝者めが。その方は父母が苦しんでも、その方さえ都合が好ければ、好(い)いと思っているのだな」

閻魔大王は森羅殿も崩(くず)れる程、凄(すさま)じい声で喚(わめ)きました。

「打て。鬼ども。その二匹の畜生を、肉も骨も打ち砕いてしまえ」

鬼どもは一斉に「はっ」と答えながら、鉄の鞭（むち）をとって立ち上ると、四方八方から二匹の馬を、未練未釈（みしやく）なく打ちのめしました。鞭はりゅうりゅうと風を切って、所嫌（きら）わず雨のように、馬の皮肉を打ち破るのです。馬は、――畜生になった父母は、苦しそうに身を悶（もだ）えて、眼には血の涙を浮べたまま、見てもいられない程嘶（いなな）き立てました。

「どうだ。まだその方は白状しないか」

閻魔大王は鬼どもに、暫く鞭の手をやめさせて、も

う一度杜子春の答を促しました。もうその時には二匹の馬も、肉は裂け骨は砕けて、息も絶え絶えに階（きざはし）の前へ、倒れ伏していたのです。

　杜子春は必死になって、鉄冠子の言葉を思い出しながら、緊（かた）く眼をつぶっていました。するとその時彼の耳には、殆（ほとんど）声とはいえない位、かすかな声が伝わって来ました。

「心配をおしでない。私たちはどうなっても、お前さえ仕合せになれるのなら、それより結構なことはないのだからね。大王が何と仰（おっしゃ）っても、言いたくないことは黙って御出（おい）で」

それは確に懐しい、母親の声に違いありません。杜子春は思わず、眼をあきました。そうして馬の一匹が、力なく地上に倒れたまま、悲しそうに彼の顔へ、じっと眼をやっているのを見ました。母親はこんな苦しみの中にも、息子の心を思いやって、鬼どもの鞭に打たれたことを、怨む気色さえも見せないのです。大金持になれば御世辞を言い、貧乏人になれば口も利かない世間の人たちに比べると、何という有難い志でしょう。何という健気な決心でしょう。杜子春は老人の戒めも忘れて、転ぶようにその側へ走りよると、両手に半死の馬の頸を抱いて、はらはらと涙を落しなが

ら、「お母さん」と一声を叫びました。…………

六

その声に気がついて見ると、杜子春はやはり夕日を浴びて、洛陽の西の門の下に、ぼんやり佇んでいるのでした。霞んだ空、白い三日月、絶え間ない人や車の波、――すべてがまだ峨眉山へ、行かない前と同じことです。

「どうだな。おれの弟子になったところが、とても仙人にはなれはすまい」

片目眇（すがめ）の老人は微笑を含みながら言いました。

「なれません。なれませんが、しかし私（わたし）はなれなかったことも、反（かえ）って嬉しい気がするのです」

杜子春はまだ眼に涙を浮べたまま、思わず老人の手を握りました。

「いくら仙人になれたところが、私はあの地獄の森羅殿の前に、鞭を受けている父母を見ては、黙っている訳には行きません」

「もしお前が黙っていたら――」と鉄冠子は急に厳（おごそか）な顔になって、じっと杜子春を見つめました。

「もしお前が黙っていたら、おれは即座にお前の命を

絶ってしまおうと思っていたのだ。――お前はもう仙人になりたいという望も持っていまい。大金持になることは、元より愛想がつきた筈だ。ではお前はこれから後、何になったら好いと思うな」

「何になっても、人間らしい、正直な暮しをするつもりです」

杜子春の声には今までにない晴れ晴れした調子が罩っていました。

「その言葉を忘れるなよ。ではおれは今日限り、二度とお前には遇わないから」

鉄冠子はこう言う内に、もう歩き出していましたが、

急に又足を止めて、杜子春の方を振り返ると、
「おお、幸（さいわい）、今思い出したが、おれは泰山（たいざん）の南の麓（ふもと）に一軒の家を持っている。その家を畑ごとお前にやるから、早速行って住まうが好い。今頃は丁度家のまわりに、桃の花が一面に咲いているだろう」と、さも愉快そうにつけ加えました。

底本：「蜘蛛の糸・杜子春」新潮文庫、新潮社
　　１９６８（昭和43）年11月15日発行
　　１９８９（平成元）年５月30日46刷
入力：蔣龍
校正：noriko saito
２００５年１月７日作成
２００５年11月23日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。